

阿部知二のハンセン病認識

——小川正子像の変遷から——

西 村 峰 龍

序

阿部知二は社会派の作家として知られ、特に戦後は血のメーデー事件の特別弁護人や松川事件などへ関わり、社会参加を行う進歩的知識人としての姿勢を明瞭に示している。しかし、阿部が戦前・戦後を通じて療養所に隔離されたハンセン病患者が運営する同人誌の選評や講演を行い、「初秋の海にて」（『新文学』昭和二十二年十月二十五日 全国書房）や「かもめ島」（『世界』昭和二十四年二月 岩波書店）「二つの死」（『中央公論』昭和二十八年四月 中央公論社）などハンセン病療養所の関係者を扱った小説を執筆していることはあまり知られてはいない¹⁾。なかでも、「かもめ島」は大日本帝国下における隔離政策に貢献したプロパガンダ小説『小島の春』の作者小川正子をモデルとして扱っているにも関わらず、従来の研究では、何一つ言及されていない。

具体的には、平成十七年に日弁連がハンセン病問題について出版した『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書 要約版』（財団法人日弁連法務研究財団 平成十七年三月）（以下報告書）の「II 文壇におけるハンセン病観」で非ハンセン病の文学者の差別性について先駆的に検証したが、「報告書」でも「かもめ島」については取り上げられる事がなかった。また、従来の『小島の春』研究においても、小川正子の実像と当時の社会において、受容されていた小川正子像との差異については言及がなされておらず、小川が『小島の春』の続編として執筆した「続・小島の春」も考察されてこなかった。その為、阿部が「かもめ島」を「小島の春」「続・小島の春」を踏まえて執筆し、小川正子をモデルとして描いているにもかかわらず、阿部が「かもめ島」を通して、「かもめ島」が出版された昭和二十四年当時、広く社会に受容されていた聖医としての小川正子像の修正を図ったことについても考察がなされなかった²⁾。

従来のハンセン病文学研究では、作者や作品がハンセン病問題をどのように描いたか、読者に対してどのような影響力を持ったのかについては研究がなされてきたが、読者がハンセン病問題を描く書き手にどのように意識されていたかについては問題にされてこなかった。

そこで本稿では、小川の手簡や「続・小島の春」の分析を通じて、出版当時受容されていた小川正子像との差異を考察する。その上で、阿部が「小島の春」の読者を意識して、「かもめ島」を執筆し、出版当時に広く社会に受容されていた聖医としての小川正子像の修正を図った

ことを明らかにする。

一 「小島の春」の周辺から

まずは、阿部と小川正子『小島の春』が関わりについて確認しておきたい。阿部は「解説」(小川正子『小島の春』 昭和三十一年三月 角川文庫)で『小島の春』との最初の関わりを振り返り、

私がこの本を知ったのは、その出版早々のことだったから、——はつきりとした記憶はないが、おそらく昭和十三年の末であつたろう。存じ上げていた土井八枝夫人(晩翠夫人)の名で、長崎書店(今日の新教出版社)から私のところに送られてきた。まったく無名の著者の本であつたが、ふと何の気もなく取り上げて読み出してみると、強く打ってくる力がそこにあつた。当時私は、雑誌『新女苑』に若い女性のための読書案内というような記事を、何か月にわたって書いたのであるが、当然にこれを紹介することにした。

と述べている。阿部は『新女苑』の「新刊紹介」(『新女苑』一月号 昭和十四年一月一日 実業之日本社)で、

「小島の春」(長崎書店 一円五十銭)といふ小川正子といふ女性の手になつた本である。小川氏は、昭和四年に、ある女子医専を出ると、癩患者のために尽くさうといふ志を立てて、それから十年間、瀬戸内海の長島療養所につとめた人であるといふ。いま、その献身的な過労の生活のために健康をいためたので、その静養のあひだに、この本が出来上がったのだといふことである。療養所の勤めの間に、あるひは四国の山間に、あるひは中国地方の辺境、あるひは瀬戸内海の孤島に、不便の旅のあらゆる労苦を忘れて、癩患者をたづねて診察にゆき、癩者の友となつて労つたり、その病気の知識を普及させるために活動したり、いやがる人を療養所に連れてくることをしたりした。その仕事の、一部分の想出が、この本になつてゐる。

と小川正子のことを紹介している。

阿部は「かもめ島」と同時期に執筆した「初秋の海にて」³⁾で「その手記を取り上げたのは、もつと有力な文士もたくさん居たし、また映画になつたことにまで私の責任はないとしても、考えてみると、私が最初に取上げたというのは事実らしい。」と記している。事実、阿部の他にも「有力な文士」達が「小島の春」を取り上げていた。例えば、小林秀雄は『東京朝日新聞』(昭和十四年一月十一日 東京朝日新聞社)で、「小川正子氏の「小島の春」は近頃読んだ

本の内で、最も感銘の深いものであつた。（中略）この種の本が、もつと沢山出て、もつと世間に読まれる事を切望する者だ。この種の本とは人間が其処で嘘を一つも書かぬ本、といふより寧ろ書く必要のない本といふ意味なのである。」と絶賛している。

「小島の春」や小川正子に対する賞賛は作家だけに留まるものではなかった。「小島の春」出版から一年後の『東京朝日新聞』（昭和十四年十二月六日）には、「小島の春」と云えば、誰でもあゝ長島愛生園の女医官、小川正子さんの救癩記だとなづく程、この一年間に読書界を席卷してしまつたが、この一本が世に現れる迄は、うら若い女性の身で人の嫌がる救癩にたづさはり、四国の山奥や瀬戸内海の島々に、黙々と検診行を続け、癩は遺伝であるといふ誤つた思想を正し、小島に春を取り戻すべく黙々として働いてゐたのであつた。」と小川を顕彰する記事が掲載される。この当時の状況を振り返って瀬戸内晴美は「小川正子は、自分の勤めている瀬戸内海の小島の患者たちの生活からときはじめ、四国の山中をわけいって、かくれた患者を発見し、説得し、病院に収容した時の経験を話し、最後に私たちの土地のあやまった信仰と人道主義から脱して、もっと科学的に目覚め、この伝染病と、患者に接してほしいということ力を説いた。話しているうちに小川正子の平凡な顔は、光が射すような輝きにみちてきた。」⁴⁾と述べている。

ここまで見て来たように、阿部が『新女苑』の「新刊紹介」で『小島の春』を取り上げて以後、『小島の春』は文壇でも高く評価されベストセラーとなり、作者小川正子は『小島の春』から創出されたイメージによって日本における稀有な存在の女医として当時の社会に認識される。それは、講演を聞いた人をして「平凡な顔は、光が射すような輝きにみちてきた。」と聖なる存在として回想されるものであつた⁵⁾。

しかし、小川は「日本における稀有な存在」の女医として顕彰されるどころから遠くにいた。小川は愛生園の医官内田守宛の書簡⁶⁾で当時の状況について、

つまらぬ日誌を発表して下さってありがとうございます。

あの記事のどこに新聞に発表するだけのカチのあるところがあるのでしょうか。私にはいくら読みかえしてもわかりませんでした。（中略）

そんなにしてまで療養所の存在、働くものの存在が発表なさり度いのでしょうか。多少は考慮した上で出して下さるかと思つたのは当方のあやまりです。以後の発表はお断りいたします。

文芸会館とかの件は私にはいままでお話にないことでわかりかねます。

予防協会で作って貰いなさい。

と述べており、「小島の春」の基となつた日誌の発表にすら疑念を持ち、小川の業績をたたえて文芸会館を作る話しも拒否している。また、小川正子の上司であり愛生園の園長でもあつた

光田健輔は、小川正子没後に組まれた療養所機関誌の特集⁷⁾で、

女史にして少し山気あつたら、「小島の春」の続編をものにするに何の骨折りもない、又小説やら雑文も引籠り中に書けたかも分からない、女史はそんな事を嫌ふて居つた、一夏信濃の蓼科高原に静養したときには小川喜美子と変名して来客から逃避してひたすら静養を続け大いに軽快した模様であるから愛生園からも他の療養所からも再起奉公を促したが、女史は厚生省は健康を司る本元である、結核性の職員は淘汰しなければならぬ筈である、自分はまだ全治とは行かぬのであるから御免を被るが本当であると云ふて聞かなかつた。

と生前の小川を回想している。内田宛の書簡や光田の回想からは、当時、世間一般に受容されていた小川正子像と小川喜美子という変名を使って隠棲し、世間の喧噪からは遠くにいる小川正子当人との間にはかなりのずれがあったことが分かる。また、光田は「小島の春」の続編を書くことを小川が「嫌ふて居つた」と続編が書かれていないかのように回想していることにも留意しておきたい。しかし、実際には、小川は蓼科高原で「小島の春」の続編を書いているのである。

二 「続・小島の春」

光田が書かれていないかのように回想していた「続・小島の春」⁸⁾は「小島の春」で創出された「平凡な顔は、光が射すような輝きにみちてきた。」と聖なる存在として回想される女医としての小川正子像を裏切るものであった。一例を挙げれば「続・小島の春」では、

松原は内科室の外側の壁に向つて泣いて居り、婦長さんと内科の看護婦さんが傍に立つて、婦長さんはずり下がつて居る松原の三尺帯を結び直して居た。一寸ホロリとしながらも、余芸がありすぎての自分の現在の窮境だとは思ひかへされず「何だい、泣虫！こつちや泣けるどころの沙汰ではないぞ」狼を避けて、虎に境遇する悲運も、皆お前のおかげぢやないかと、憤懣の余燼はをさまらなかつた。

と描かれる。この場面は療養所で松原という患者と喧嘩し、逃げた松原を追いかけていった場面なのだが、患者の気持ちに寄り添うと言うよりは、婦長に遭遇した自身の悲運を嘆き「虎に境遇する悲運も、皆お前のおかげぢやないかと、憤懣の余燼はをさまらなかつた。」と非常に自己中心的な人物のように描かれている。

また、自身が結核に罹患して療養中に喧嘩した患者松原を思い出す場面では、

母の様なおほどかな心！！さういふものを私はまだ持つて居なかつたのだ。喧嘩の相手はしたけれど、花の話の相手にはなつたけれど、寂しい松原の心が呼ぶ母の心には遠い遠い私であつたのだ。（中略）自ら病みて寝ておもふ故里の日々に、松原の心持ちを思ひやつて見れば、何よりもかよりも、自分におほどかな母心の足りなかつたことがおもはれるのだ。「松原、気がつかなくなつたんだよ、堪忍して呉れな」机の上の桜草の鉢に向つて居て、私は、そう声を出して云はずには居られないのだ。

と自身が結核に罹患して初めて「自分におほどかな母心の足りなかつた」ことに気付いたことが描かれる。「松原、気がつかなくなつたんだよ、堪忍して呉れな」と述べる小川は『小島の春』で世間が抱いた「光が射すような輝きにみちてきた。」聖なる存在としての女医からは遠い。

だが、この様な小川の姿は取り上げられることはなかつた。「続・小島の春」には、管見の限りでは同時代評がなく、小川の上司であり、隔離政策を推し進めた光田健輔は、蓼科高原で療養中の小川を見舞いにまで行っている⁹⁾が、光田が園長していた療養所機関誌『愛生』の小川正子追悼号では、「続・小島の春」についてふれることはなかつた。それだけでなく、『愛生』の小川正子追悼号では、小川関連の追悼記事が半数を占めるにもかかわらず、「続・小島の春」については誰もふれてはいない。光田の文章が載った当時、ベストセラーとなった作品の続編であること、映画『小島の春』が「続・小島の春」発表当時に上映されていたことを考えれば追悼号で誰も「続・小島の春」についてふれていないことは不可解である。これは、患者と喧嘩し、自身が結核を患って初めて、自分におほどかな母心の足りなかつたで接する事が出来なかつたと反省する小川は『小島の春』で世間が抱いた「光が射すような輝きにみちてきた。」聖なる存在としての女医像と齟齬をきたすため、書くことを避けたのではないだろうか。

三 小川正子と「かもめ島」

ここまで、『小島の春』から創出した小川正子像と小川正子当人とのずれを小川の書簡や「続・小島の春」を通して確認してきた。では、『小島の春』をいち早く紹介し、ハンセン病療養所機関誌でも選評をおこなっていた阿部知二は小説「かもめ島」でどの様に小川正子を描いているのだろうか。

まずは論の見通しを良くするためにも、「かもめ島」の梗概を述べておく。「かもめ島」は四国の従兄を訊ねた私は偶然、新聞を経営している木野に出会う。私は木野から講演の依頼を受け対岸の市に渡る。その後、対岸の市からかもめ島に木野と共に向かう。かもめ島の宿で酒を飲みながら木野がハンセン病療養所を訪問し、其処で働くA女医の話の間かされる。A女医はかもめ島を訪問し、ハンセン病に罹患していた娘カヨを療養所にいれるように説得し、二回目のかもめ島訪問時にカヨを療養所に入所させる。木野はカヨを訪ねて二回療養所を訪問し、

一回目と二回目のA女医の変化について話し続ける。

次に「かもめ島」の成立事情について見ておきたい。「かもめ島」は昭和二十四年二月に雑誌『世界』に掲載され、四カ月後に『探書マンズリー』に再掲される。再掲時には、「この感動深い物語を読んで、嘗つて文字通り洛陽の紙価を高め、また映画ファンの血を湧かせた尊い人間記録「小島の春」とその筆者小川正子さんのことを思い出さぬ人があろうか¹⁰⁾との謳い文句が付される。謳い文句からは、「かもめ島」が「小島の春」を読んでいることを前提にしており、作中の女医が小川正子と重ねて読まれる可能性を意識していることが分かる。

事実、「かもめ島」は「小島の春」を意識して書かれている。「かもめ島」と「小島の春」には、女医が村にハンセン病患者を探しに行き、病者の家族や親せき達のハンセン病療養所に対する誤解を解く共通の場面がある。

① 夜は、村の主立つたもの、病者の家族や親戚たちが、大倉の家に集まつたが、木野も、何とはなしにその席に加わつた。多くのものたちは、国立の療園というものを、ゆうべの話をしき映画をみても、まだ疑つており、入れて注射をして殺すのだ、とはつきりと言つて食つてかかるものもあつた。女医は、そのときはけんそんに静かに、病気の性質や療園の施設についてくりかえしながら説明した。¹¹⁾

② 座談会を通して、癩の伝染について又療院の実状について談して貰ひたいといふ考えであるらしかった。(中略)又「こんな事を聞いちや失礼ですが、この島ぢや病院へやると、すぐに注射をして殺してしまうと申しますが、ほんとうでしょうか。」と言う、私はにっこりとして、それに対する返事を言い出そうとする。¹²⁾

①が「かもめ島」であり、②が「小島の春」である。①「かもめ島」と②「小島の春」には、女医がハンセン病療養所に入ると「注射」によって殺されてしまうという誤解を正す共通のエピソードが描かれており、①「かもめ島」が②「小島の春」を踏まえて書かれていることが分かる。

また、阿部が「解説」¹³⁾で、「小川正子という人については、私は経歴もよく知らず、また面接したこともない。いまこの本に附せられたところの、彼女のすぐれた師たちの文章によってうかがっていただきたい。ただ、私は戦後になって——彼女が亡くなって（昭和十八年四月没）から歳月がたつてから、長島を訪ねたり、瀬戸内海の旅をして偶然に彼女の足跡のある島に立ち寄りたりしたことがあり、その時などに、すこしばかり彼女のことをきく機会があった。」と述べていることから、「かもめ島」は小川正子『小島の春』を踏まえた上で、阿部が生前の小川正子を知る人達から聞いたことを基にして書いたことが推測される。

だが、「かもめ島」は『小島の春』から創出された聖なる存在としての小川正子を描いてい

るわけではない。「かもめ島」では、「——A女医には失恋があつた。この療園のすぐれた一人の医師と、思想も合い、A女医自身もまた他人も、その二人が結婚するだろうと思つていたところが、どういうわけからか、Aの妹分のような、どちらかといえば平凡な女医と、その医師は結婚してしまつた。そのころから、Aの病気はわるくなり、また一種のヒステリのようになり、突然泣き出したり笑い出したり、人に当たり散してののしつたり、——仕事はますます立派に熱心にするのだが、奇矯なふるまい多くなつてしまつた。」と描かれており、聖なる存在としての小川正子ではなく、恋愛に敗れ傷つき、自暴自棄になるどこにでもいる一人の女性としての側面が強調される¹⁴⁾。そして、小説の終盤では、「Aの本当の人格は、その無私の献身とその懊悩絶望との両方にまたがつて生きているのであり、一つが無ければ他も無いのであり、このことのためにこそAは真に立派なのだ、と、よくわけは分らぬながらに思つた。」と締めくくられる。

ここまで、「かもめ島」について「小島の春」と比較しながら分析してきた。纏めておくと、「かもめ島」は『小島の春』を踏まえた上で、書かれたことが推測されるが、阿部は「かもめ島」で『小島の春』から創出され、出版当時、受容された「日本における稀有な存在」の救癩の聖医・「愛の天使」としての小川正子像を拒否し、恋愛に敗れ傷つき、自暴自棄になるどこにでもいる一人の女性としての側面を強調した。これは、患者と喧嘩をし、自身が結核を患つて初めて、患者に対して母のような「おほどかな心」で接する事が出来なかつたと反省する「続・小島の春」で描かれた小川に近似している。事実、「かもめ島」では、A女医（小川正子）は、「日本における稀有な存在」の救癩の聖医・「愛の天使」などではなく、「無私の献身」と「懊悩絶望」を併せ持つ存在であり、だからこそ「Aは真に立派なのだ」と描かれる。

四 阿部知二とハンセン病

一節でも確認したように阿部は『小島の春』を先駆的に取り上げ、高く評価する書評を書いていた。また、阿部は『小島の春』出版後の座談会¹⁵⁾において、

阿部 或いは一般市民と申しますか、大衆といつても宜いだらうと思ひますが、さういつた人々が、単に癩とかいふものに限らず、人道的な精神といふ部分を持つた創作とか、広い意味での文芸、さういつたものを非常に受け入れようとしている。(中略) 吾々はさういつた日本文化の高まり、或いは人道主義的な精神の繋がりといふやうなものに対して謙譲であつて、さういつた精神に遅れないやうに出来る限りのことをして見たいと思つて居る訳でございます。さうして生意気なことをいふようですが、かういつた癩なら癩といふものに対する一般社会の注意を喚起したりするといふことは、広い意味でさういつた精神と結び付いて——又これは単にこれだけでなく、他に日本には色々なさういつた注意を喚

起すべきことが社会上にあると思ひますが、それらと結び付いて益々進んで行くやうになることを希望致します。

と述べている。ここで阿部は一般市民が「人道的な精神といふ部分を持つた創作とか、広意味での文芸、さういつたものを非常に受け入れようとしている。」と述べており、『小島の春』の読者と人道主義との結び付きを見ている。また、創作作品が「癩なら癩といふものに対する一般社会の注意を喚起したりするといふことは、広い意味でさういつた精神と結び付いて」いると述べて作品と人道主義との結びつきによって救癩事業に貢献していくことを期待していた。

しかし、阿部は戦後に執筆した小説「初秋の海にて」¹⁶⁾で「その本が、それほどさわがれたことが、いつたい日本の救癩の事業にどれほどの本質的な寄与をしたか、そのさわぎ、ついに一つの浮気な流行でしかなかつたか、ともうたがわれてくるのだ」と『小島の春』について否定的な見解を述べる。その後、阿部は本節で取り上げた「かもめ島」において「一体こういう病気は、社会が正しくなり、十分な施設をしてすべての患者を収容することによって、はじめて絶滅出来るのだ、だから、そういう社会を造るために働くことの方が人道主義よりも早道なのだ、——と、自分にそれを言う資格はないと知りながら、つい、言葉を返した。」と「初秋の海にて」から更に踏み込みんだ見解を述べている。阿部はここで、座談会において「癩文学」（「小島の春」）と人道主義との結びつきをみた自身を否定し、「社会が正しくなり、十分な施設をしてすべての患者を収容する」こと、つまりハンセン病隔離政策を肯定したかたちでのハンセン病者の救済を志向している。

阿部がハンセン病を社会の問題として捉えていたことについては、既に別稿に言及しているので詳しくは述べないが、阿部は「かもめ島」発表から数年後の昭和二十八年三月「歌集「木がくれの實」に寄せて」で、ハンセン病の問題を社会の貧困の問題や労働問題として捉えていた。阿部には、隔離制作を社会から排除される差別の問題として見る視点はなく、ハンセン病の治療薬プロミンの存在やハンセン病の伝染力の微弱さを認識しているにもかかわらず、隔離政策の必要性を主張していた。しかし、付言しておくとしてハンセン病の伝染性の微弱さや治療薬プロミンの存在は昭和四十年代になっても人口に膾炙してはいなかったこともまた事実である¹⁷⁾。

阿部が「かもめ島」で救癩の聖医・「愛の天使」小川正子としてA女医を描かず、「無私の献身」と「懊悩絶望」を併せ持つ存在として描いていることは三節でも確認した。阿部は「解説」¹⁸⁾でも「小川正子とは、何か人間ばなれのした聖女のようなものであつたのではなく、あやまちもある当たりまえの女性であつたと思うことの方が彼女の人物をわれわれにいつそう親しいものを感じさせ、そして彼女の事業に対する尊敬の念をいつそう強いものにさせる、と思つたからである。彼女は、自己の内と外でのたたかきをもちながら、その生涯をすごしたのだと考へたいのである。」と述べている。つまり、阿部は隔離政策を批判するためにA女医（小

川正子)を「無私の献身」と「懊悩絶望」を併せ持つ存在として描いたのではない、「彼女の事業に対する尊敬の念をいつそう強いものにさせる」ためにそのように描いたと推測できる。

阿部は「かもめ島」で「十分な施設をしてすべての患者を収容する」ことを「社会が正しくなることだとしている。つまり、阿部には隔離政策を否定する意思はなく、「聖女」としてのA女医（小川正子）ではなく「あやまちもある当たりまえの女性」としてのA女医（小川正子）を提示することが、「社会が正しく」し、『小島の春』出版でおこった人道主義と結びついた「浮気な流行」を断ち切り、ハンセン病患者の隔離に貢献すると考えたのである。

まとめ

阿部知二は、小川正子『小島の春』を先駆的に取り上げ、人道主義の観点から激賞し、『小島の春』のベストセラー化に先鞭をつけた。戦後にはハンセン病患者との交流で得た知識（情報）や『小島の春』『続・小島の春』を基にして、「かもめ島」を書く。そこでは、読者が『小島の春』の受容を通じて創造した、人道主義に基づいて行動する救癩の聖医・「愛の天使」としての小川正子像ではなく、「続・小島の春」で記された、患者の心を理解出来なかったと反省する「あやまちもある当たりまえの女性」としての小川正子像を提示する。また、作中で安易な人道主義を否定して、ハンセン病を社会の問題としてみることを提起し、社会の問題としてハンセン病と向き合うことを求めている。

これは、阿部が「小島の春」の読者の熱狂を「一つの浮気な流行でしかなかったか」と疑いを抱いていたからであり、「人間の一人一人を尊重しよう、人間性の自由を愛しようなどといつてしまっているならば、まさにそのヒューマニズムは無益、無害であるどころか無益有害な恐るべきアヘンでしかない。」¹⁹⁾との考えがこの頃から胚胎していたからではないだろうか。『小島の春』が安易な人道主義に根差して受容されていた社会状況で、阿部が小川正子像を描き直しハンセン病を社会の問題としてみることを提起した意義は大きい。

しかし、阿部が「かもめ島」で小川正子像を描き直したのは『小島の春』を通じて小川が救癩の聖医・「愛の天使」として受容されることで、強制隔離政策の実行を容易にしたことを批判するためではない。阿部は「小島の春」に人道主義との結びつきをみた自身や「小島の春」の読者を否定し、社会改良によるハンセン病患者の救済を志向しているが、阿部が志向するハンセン病に対する社会改良とは隔離政策の強化・徹底であり、このような志向の延長線上に「かもめ島」での小川正子像の描き直しがある。つまり、阿部には隔離政策を否定する意思はなく、「聖女」としての小川正子像ではなく「あやまちもある当たりまえの女性」としての小川正子像を提示したほうがより社会改良に貢献すると考えたのである。ハンセン病の伝染性が微弱であり、治療薬プロミンの存在を知らずながらなお隔離政策の必要性を述べる阿部を後に自身が言及し、批判する現代のありかたを守る「反ヒューマニスト」であるとして、阿部のハンセ

ン病認識の限界を指摘することは容易いが、現在の視点からのそのような拙速かつ稚拙な評価は避けたい。

ハンセン病の伝染性が微弱であり、治療薬プロミンの存在は昭和四十年代になっても人口に膾炙してはならず、ハンセン病患者に対する根強い差別があり、ハンセン病患者の社会復帰は進んではいなかった。このような状況下では、隔離して治療することの必要性を説いた阿部を批判することはできない。むしろ、ハンセン病は遺伝であることを否定し、『小島の春』出版でおこった人道主義と結びついた「浮気な流行」を断ち切り、ハンセン病を社会の問題としてみることを提起したことこそ記憶に留められるべきであろう。

注

- 1) 阿部の伝記的研究においても森本穂『阿部知二—原郷への旅—』(平成九年二月 林道舎)や竹松良明『阿部知二 道は晴れてあり』(平成五年十一月 神戸新聞出版総合センター)の評伝があるものの阿部と「癩」患者達との交流については詳細な言及はなされていない。
- 2) 『小島の春』の先行研究については荒井裕樹が『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史—』(平成二十三年十一月 書肆アルス)で纏めているので引用する。「『小島の春』に関して、また著者の小川正子に関して、文学研究や歴史学の見地から、これまで多くの言及がなされてきた。それらの先行研究は、概ね次の二つの問題を焦点にしてきたと言えるだろう。すなわち (一)『小島の春』がベストセラーとなった社会的背景や思想的土壌と、また同書が社会に与えた影響の相関関係、(二)小川正子がハンセン病患者に対して見せる他者認識の特異性の二点である。」と述べている。
荒井を踏まえた上で、重要な論考として (一)については、ハンセン病への社会への偏見を増大させたことについては木村功『病の言語表象』(平成二十八年三月 和泉書院)が詳しい。また、『小島の春』が何故、多くの読者を獲得したかについては松岡秀明「感傷、短歌、パターナリズム—小川正子の『小島の春』をめぐる—」(『国際経営・文化研究』平成二十八年十二月 国際コミュニケーション学会)が詳しい。また、松岡には映画『小島の春』での短歌の使われ方、効果を分析した「ハンセン病と短歌：映画〈小島の春〉をめぐる」(『Communication-design』平成二十七年三月 コミュニケーションデザイン・センター)がある。(二)については「病友」という言葉の変遷から小川の他者認識に天皇制がどのように作用しているかを分析した「第六章 病友なる支配—小川正子『小島の春』試論—」『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史—』(平成二十三年十一月 書肆アルス)がある。
- 3) 『新文学』(昭和二十二年十月二十五日 全国書房)
- 4) 瀬戸内晴美『いづこより』(昭和五十三年 新潮文庫)
- 5) 小川正子が救癩の聖医として社会に受容されたことについては、荒井英子が『ハンセン病とキリスト教』(平成八年十二月 岩波書店)が先鞭をつけた。また、丸山泰明「「癩」とヒロイン—近代におけるイメージの創出をめぐる—」(『大阪大学日本学報』平成十二年三月 大阪大学)も詳細に論じている。
- 6) 「小川正子より長島愛生園医官内田守宛 手紙 昭和十四年二月四日」(坂入美智子『潮鳴りが聞こえる—私の小川正子—』平成十三年七月 不識書院)
- 7) 光田健輔「純真なる小川女史」(『愛生』昭和十八年五月 長島愛生園慰安会)
- 8) 『婦人公論』(昭和十五年四月 中央公論社)
- 9) 光田が小川を見舞ったことについては立川昇「小川先生を偲ぶ」(『愛生』昭和十八年五月 長島愛生園慰安会)に「戦地で病を得た私が未だ〇〇陸軍病院に居た頃、蓼科高原の先生の許にお見舞い行かれた光田園長との寄せ書を送つて来て“どうだ羨やましいだらう”等と私を悔しがらせて喜んで居たらしい」とある。
- 10) 「再掲謳い文句」(無題の為、発表者)(『探書マンスリー』昭和二十四年六月 新府書房)

- 11) 本稿での引用は総て「かもめ島」（『世界』昭和二十四年二月 岩波書店）による。
- 12) 小川正子「小島の春（其の一）」（『小島の春』昭和三十一年三月 角川文庫）
- 13) 小川正子『小島の春』（昭和三十一年三月 角川文庫）
- 14) 「かもめ島」で描かれている女医の失恋は実際に小川正子が経験したことである。詳細については名和千嘉『小川正子と愛生園』（自費出版 昭和六十三年三月一日）が詳しいので引用しておく。「光田園長から井上氏にお手紙が来た。それによると、林先生に結婚をすすめられて、小川正子でも大西富美子でもあげから、林先生の意向を伺うようにと。井上氏の言葉に文雄先生は「一晩考えさせてくれ」といわれ、翌日「大西さんがよい」といわれた。（中略）大西さんは、光田園長のお話を伺ってから、小川さんに相談されたという。小川さんは「相手にとって不足はない方だ、私は不渡り手形をもらったようなものね。」とおっしゃったという。小川さんにとってはすさまじい心の痛手であったと想像される。」
- 15) 「癩文学を語る（座談会）」（『改造』昭和十四年七月 改造社）
- 16) 『新文学』（昭和二十二年十月二十五日 全国書房）
- 17) ハンセン病の伝染性の微弱さや治療薬プロミンの存在についての世間の反応がうかがえるので「放送塔 社会復帰に理解を」（『読売新聞』朝刊 昭和四十年十二月二十一日 読売新聞社）を引用する。「TBS テレビ十六日夜、人間「ある青年の出発」は、ハンセン氏病を克服し、社会復帰の困難に打ち勝って、強く生き抜く青年の勇気を描いたものだったが、私たち患者にとっては全く見ごたえがあった。ライは最近、進歩した新薬のために全治可能となったが、まだ全治した人に対する社会の偏見が強く、生まれ故郷にも帰れず、職場も与えられず共同生活をこぼまれている。私たちの療養所にもそうした人が数多くいる。社会復帰に、正しい理解と暖かい愛の手をさしのべていただきたいとしみじみ思った。（東京都東村山市・療養中・M・K子）」
- 18) 小川正子『小島の春』（昭和三十一年三月 角川文庫）
- 19) 阿部知二「ヒューマニズムという言葉（三）」（『新日本文学』昭和三十四年一月 新日本文学会）

キーワード：ハンセン病、阿部知二「かもめ島」、小川正子「小島の春」

AbstractAbe Tomoji's recognition of Hansen's disease:
the transition of image of Ogawa Masako

NISHIMURA, Minetatsu

It is not well known that Abe Tomoji, a liberal novelist, selected and made comments on writings of the magazine which conducted by Hansen's disease patients who were isolated in sanatoria before and throughout the war or gave lectures in sanatoria. Abe wrote novels about Hansen's disease sanatorium and Hansen's disease patients such as "Shosyuunoumi", "Kamomejima", "Hutatsunoshi" in Showa 20's but it is not well known either. Especially, "Kamomejima" has not been mentioned in the conventional research although it is written about a doctor modeled after Ogawa Masako, an author of the propaganda novel, "Kojimanoharu" and contributed to the isolation policy under the Empire of Japan, as a model.

Also it is not mentioned about the difference between the image of Ogawa which widely accepted by the society and Ogawa in reality in the conventional study of "Kojimanoharu". Thus, it has not considered how Abe tried to revise the image of Ogawa as a holy doctor by writing "Kamomejima" in Showa 24.

Therefore, in order to clarify Abe's attempt to revise image of Ogawa by writing "Kamomejima" based on readers of "Kojimanoharu", I considered about the difference between Ogawa in reality and image of Ogawa as holy doctor when "Kamomejima" was published by analyzing Ogawa's letters and "Zoku Kojimanoharu"

Keywords: Hansen's Disease, Abe Tomoji "Kamomejima", Ogawa Masako "Kojimanoharu"